

2008年名古屋大学附属図書館 源氏物語千年紀記念事業

源氏物語の書物と絵画

源氏物語の書物と絵画



2008年 **11月10日**月 ~ **11月24日**月・祝

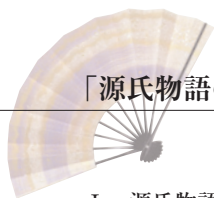
名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

2008年名古屋大学附属図書館
源氏物語千年紀記念事業

源氏物語の書物と絵画



「個人蔵」以外は、神宮皇学館文庫・岡谷文庫・小林文庫・森本文庫も含め、すべて名古屋大学附属図書館所蔵である。



「源氏物語の書物と絵画」展示解説

| | | |
|-----|-----------|----|
| I | 源氏物語千年紀 | 1 |
| II | 源氏物語の絵画 1 | 2 |
| III | 源氏注釈書 | 3 |
| IV | 源氏物語周辺の作品 | 6 |
| V | さまざまな源氏享受 | 9 |
| VI | 源氏物語の絵画 2 | 12 |

執筆：高橋 亨 眞野 道子

「源氏物語の書物と絵画」展示解説



I. 源氏物語千年紀

寛弘5年(1008)の皇子誕生を中心とした『紫式部日記』からは、『源氏物語』が当時すでに評判となっていた様子がうかがえ、それからちょうど1000年に当たる今年が「源氏物語千年紀」とされることとなった。この1000年の間、『源氏物語』は多くの人々にさまざまな形で読み継がれてきた。

源氏物語千年紀

【1】紫式部日記傍註

版本 大本2冊 (神宮皇学館文庫 915.35-Tu)

『紫式部日記』の注釈書。壺井義知著。本文に傍注振り漢字・頭注を施す。享保14年(1729)序・自跋・奥書。文政4年(1821)補刻、河内屋儀助(大阪心斎橋通北久太良町北エ入)刊。

【2】国宝紫式部日記絵巻(複製)

五島美術館蔵『紫式部日記絵巻』(鎌倉時代前期成)の複製。

源氏物語の諸本

『源氏物語』には多くの伝本が現存しているが、それらは鎌倉時代に藤原定家が校訂した本の系統「青表紙本系」、河内守源光行・親行が校訂した本の系統「河内本系」、その2つに属さない「別本系」の3種類に大別される。写本として伝わっていた時代には限られた人々しか手にすることのできなかった『源氏物語』だが、近世の出版文化の誕生により何種類もの版本が刊行され、一般層にまで広く流布することとなった。

【3】源氏物語

版本 大本59冊(「源氏引歌」1冊欠) (神宮皇学館文庫 913.36-Mu)

『源氏物語』の絵入版本。山本春正による傍注あり。源氏五十四帖に「山路の露」1冊・「源氏目案」3冊・「源氏系図」1冊を付す。慶安3年(1650)山本春正跋。近世前期刊。

【4】源氏物語

版本 大本 59 冊（「浮舟」巻欠）（岡谷文庫 913.36-Mu）

『源氏物語』の絵入版本（慶安版本の再版本）。山本春正による傍注あり。源氏五十四帖に「源氏系図」1冊・「源氏引歌」1冊・「源氏目案」3冊・「山路の露」1冊を付す。慶安3年（1650）山本春正跋。承応3年（1654）八尾勘兵衛（洛陽寺町通）刊。

【5】源氏物語 桐壺の巻

写本 大本 1 冊（神宮皇学館文庫 913.36-Mu）

『源氏物語』桐壺巻のみの写本。彩色絵入。本文は青表紙本系。絵は慶安版本に類似。近世前期写。旧蔵印「来田氏家蔵」。



[5]



II 源氏物語の絵画 I

『源氏物語』は絵画としてもまた享受されていた。やまと絵と美しい書を組み合わせて平安時代後期（院政期）に作られた国宝の徳川五島本『源氏物語絵巻』をはじめ、多数が現在に伝わるが、その多くは江戸時代以降のものである。絵巻や画帖、屏風といった形で貴族（公家）のみでなく、武家もまた権威の象徴や姫君たちの嫁入り調度として所有していた。

【6】河内本源氏物語（複製）

蓬左文庫蔵『尾州家河内本源氏物語』（近世前期写）の複製。

【7】源氏物語図屏風 六曲一隻

作者不明 江戸時代初期（個人蔵）

画面向かって右上は初音巻の新春を祝う光源氏と紫上。その左は常夏巻の夏、光源氏が東の釣殿に内大臣（頭中將）の子息たちを招いて涼をとり、川魚などを料理させて歓談する情景。右下は若菜下巻の六条院の女楽で、中央に光源氏と金屏風の前で琴を弾く女三宮、左上が和琴の紫上、その下で琵琶を弾くのが明石君、向かって右の几帳に半は隠れて箏を弾く明石女御。笛を吹く三人の童や女房たち、また右の室外に女房や庭が横長に描かれている。下の左は若菜上巻の六条院の蹴鞠場面で、走り出た猫の紐を持つ女三宮が柏木にかいま見され、やがて密通へと通じる場面。

春と夏の場面のみなので、本来はもう一隻に秋と冬の場面が描かれていた六曲一双の屏風であったと思われる。

【8】源氏物語図屏風 六曲一双

作者不明 江戸時代中期（個人蔵）

右隻：向かって右から、総合巻の総合、桐壺巻の光源氏を占う高麗の相人、帚木巻の雨夜の品定め、葵巻の紫上の成人式、花散里巻で花散里を訪れる光源氏、賢木巻の六条御息所を野宮に訪れる光源氏。左隻：右から、若紫巻で後に紫上となる少女をかいま見する光源氏、明石巻で明石君を訪れる光源氏、紅葉賀巻で青海波を舞う光源氏と頭中將、須磨巻で流離した光源氏の侘び住まい、落標巻で住吉詣でする光源氏と舟上からこれを見る明石君の一行、末摘花巻で琴を弾く末摘花をかいま見する光源氏。

いずれも『源氏物語』の第一部前半の場面なので、本来は五十四帖のすべてが描かれていた可能性もある。屏風に貼られた順序は巻の順とは一致していない。

【9】国宝源氏物語絵巻 複製（個人蔵）

昭和42年 講談社

徳川五島本『源氏物語絵巻』を原寸で四巻の卷子本として復元したもの。



Ⅲ 源氏注釈書

『源氏物語』は五十四帖という長さや難解な文章のため、すでに平安時代末期にはその読解に供するための注釈書が存在した。中世になると『源氏物語』は和歌の必須書とされたため、主に歌人たちの手によって研究が進められていった。近世に入り『源氏物語』が一般に流布すると、より多様な研究・注釈活動が展開することとなり、さらに多くの注釈書、梗概書の類が作られるようになった。

【10】ぎよくゑいしう（ぎよくえいしゅう）

写本 半紙本1冊（神宮皇学館文庫 913.364-Ky）

花屋玉栄著。源氏物語入門者に向けて、読者の心得、各巻題号の由来、物語中の難語の注釈を記したもの。著者玉栄は奈良慶福院の尼僧。慶長7年（1602）奥書。寛永20年（1643）写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[11] 伏屋塵（ふせやのちり）

写本 大本1冊（神宮皇学館文庫 913.36-G）

後水尾院による、『源氏物語』の難解箇所への注釈書。「桐壺のみかどの名」「蔵人所の鷹すゆること」「交野少将の事」等8箇条より成る。後水尾院は、天皇在位慶長16年（1611）～寛永6年（1629）、讓位後約半世紀にわたって宮廷歌壇の中心だった人物。当時の公家たちの源氏研究の一端を垣間見ることができる。近世後期写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[12] 源氏物語題号

写本 中横本1冊（神宮皇学館文庫 913.361-G）

著者未詳。『源氏物語』の概要について諸注を引き解説する。その後ろは「桐壺」のみの巻名の由来、源氏の年齢の指摘で終わっており、不完か。孤本。近世初期写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[13] 湖月抄

版本 大本56冊（「帚木」～「若紫」巻欠）（岡谷文庫 913.36-Mu）

北村季吟著。先行注釈書の集大成的性格が強い。『源氏物語』の注釈書の中で江戸時代を通じて最も広く流布した。源氏五十四帖の注釈に、「発端」「表白」「系図」「雲隠説」各1巻、「年立」2巻を付す。延宝元年（1673）自跋。林和泉・村上勘兵衛・吉田四郎右衛門・村上勘左衛門刊。

[14] 源氏七論（紫家七論）

写本 半紙横本1帖（折帖綴）（神宮皇学館文庫 913.36-H）

安藤為章著。紫式部と『源氏物語』の論書。初めに「紫家系譜」を示し、以下「才徳兼備」「七事共具」「修撰年序」等に関する諸説を引用し、それを批判する体裁で自説を展開する。元禄16年（1703）奥書。近世後期写。

[15] 源氏男女装束抄

版本 大本1冊（3巻合）（神宮皇学館文庫 913.362-Tu）

永正年間（1504～1521）に連歌師宗碩が著した『源氏物語』中の装束の解説書。壺井義知増補。享保2年（1717）壺井義知跋。銭屋儀兵衛（京堀河通高辻上ル町）・同七良兵衛（同町）求板刊。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[16] 雨夜物語たみこと葉（あまよものがたりだみことば）

版本 大本2冊（神宮皇学館文庫 913.361-Ka）

加藤宇万伎著。『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」の場面の注釈。著者宇万伎は賀茂真淵の門人。安永4年(1775)上田秋成序。明和6年(1769)自序。安永6年(1777)出雲寺文治郎・風月庄左衛門・吉田四郎右衛門・梅村三郎兵衛刊。

[17] 源語梯

版本 小本3冊 (森本文庫 913.361-G)

著者未詳。『源氏物語』に出てくる古語・難語の辞典。いろは順に分けた語を、さらに「虚詞人事」「天地時候」「人倫支体」「生植気形」「服食器財」の5門に分け、『源氏物語』の巻順に語釈を記す。五井蘭州の『源語詰』を再編したもの。天明5年序。天明4年(1784)京師書房出雲寺文次郎等8軒刊。

[18] 玉の小櫛

版本 大本9冊 (岡谷文庫 913.361-Mo)

本居宣長著。『源氏物語』の本質を「もののあはれ」と考え、注釈を付した書。巻1は「すべての物語書の事」「此源氏の物語の作りぬし」「紫式部が事」等の各論、巻2は物語論、巻3は年立、巻4は『湖月抄』と他の本文との比較、巻5以下は巻順の本文注釈。須原茂兵衛(江戸)・銭屋利兵衛(京都)・柏屋兵助(伊勢松坂)刊。近世後期刊。旧蔵印「榊文庫」。

[19] 源氏小鏡

版本 大本3冊 (神宮皇学館文庫 913.364-H)

南北朝頃に成立した『源氏物語』の梗概書。近世前期刊。

[20] 絵入 源氏小鏡

版本 大本3冊 (岡谷文庫 913.364-H)

南北朝頃に成立した『源氏物語』の梗概書。絵入。明暦3年(1657)安田十兵衛(洛陽三条寺町誓願寺前)刊。

[21] 十帖源氏

版本 大本10冊 (神宮皇学館文庫 913.364-N)

野々口立圃著・画。『源氏物語』の梗概書。絵入。近世前期刊。旧蔵印「甘露堂蔵」「霞亭文庫」。





IV 源氏物語周辺の作品

近世の出版文化に乗って急激に普及したのは『源氏物語』ばかりではない。『源氏物語』成立に大きな影響を及ぼした『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』などの「作り物語」、『伊勢物語』『大和物語』などの「歌物語」、『古今集』『後撰集』などの歌集、『源氏物語』作者とほぼ同時代の清少納言による『枕草子』などもまた、多くの版本や注釈書が作られ、一般に広く知られるようになった。

作り物語

平安時代前中期に作られた、事実に基づかない虚構の物語。古来の民間伝承や漢文に見られる伝奇などから発展した。

竹取物語

9世紀末から10世紀初頭頃の成立。作者は不明。竹取の翁によって竹の中から見つけ出され、育てられたかぐや姫が、5人の貴公子の求婚を退け、帝の召命にも応じず、八月十五夜に月の世界に帰る話。現存最古の物語で、『源氏物語』にも「物語の出来きははじめの祖」と記されている。

うつほ物語

10世紀中頃の成立。作者は源順説が有力。四代にわたる琴（きん）の秘曲伝授を中心に、美女貴宮（あてみや）をめぐる求婚や、皇位継承争いなど、多様な人間模様を描く。

落窪物語

10世紀中～末頃の成立。作者不明。継母に虐待されてきた姫君が、貴公子に見出されて結婚、継母らに復讐し屈服させるという、いわゆる「継子いじめ」の物語。

[22] たけとり物語

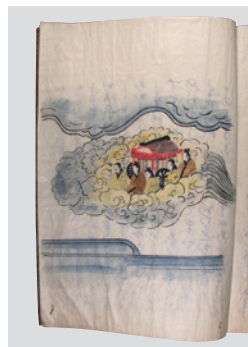
版本 大本1冊（小林文庫 913.31-Ta）

正保3年（1646）林甚右衛門尉（三条通菱屋町）刊。旧蔵識語「可涼園什（朱印「大□□印」）」。旧蔵印「川村文庫」。

[23] 竹取物語

写本 大本1冊（森本文庫 913.31-Ta）

絵入。近世後期写。旧蔵印「紫山文庫」。



[24] 竹取物語抄

版本 大本2冊（岡谷文庫 913.31-Ko）

『竹取物語』の注釈書。小山儀（伯鳳）著、入江昌喜補。天明3年（1783）序・跋。天明4年（1784）前川六左衛門（江戸日本橋三丁目）・小川多左衛門（京都六角通御幸町西へ入）・柳原喜兵衛（大阪南久太郎町心齋橋筋）刊。

[25] うつほ物語

版本 中本3冊（岡谷文庫 913.34-U）

「俊蔭巻」3巻。絵入。万治3年（1660）林和泉掾（洛陽今出川）刊。

[26] おちくぼ

写本 大本4冊（神宮皇学館文庫 913.35-O）

定家流の能筆上写本。近世前期写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

歌物語

和歌を中心とした短い物語、またそれを集めたもの。

伊勢物語

原形は9世紀末～10世紀前半頃の成立。作者未詳。在原業平と思われる男の生涯を恋と歌を中心に描く。

大和物語

10世紀中頃成立。作者未詳。和歌説話を集めた短編集。

[27] 伊勢物語

写本 枡形本1冊（列帖装）（神宮皇学館文庫 913.32-I）

永禄3年（1560）写。連歌師猪苗代長珊筆（古筆了佐の極め書あり）。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[28] 伊勢物語

版本 大本2冊（神宮皇学館文庫 913.32-I）

嵯峨本の製版復刻本。絵入。近世初期刊。旧蔵印「来田氏家蔵」。旧蔵識語「来田氏千代」。



[29] 伊勢物語かうしやく附 (いせものがたりこうしやくつき)

版本 大本2冊 (神宮皇学館文庫 913.32-I)

『伊勢物語』に頭書欄外コマ絵と傍注を付したもの。元禄15年(1702)伊藤勘兵衛・磯田太良兵衛(御幸町通二条上ル二町目)刊。旧蔵識語「小川林左衛門」。

[30] 大和物語

版本 半紙本2冊 (森本文庫 913.33-Y)

享和3年(1803)西村源六(東都)・渋川与左衛門(浪華)刊。

[31] 大和物語抄

版本 大本5冊(巻2欠) (神宮皇学館文庫 913.33-Ki)

『大和物語』の注釈書。北村季吟著。承応元年(1652)自奥。承応2年(1653)中野小左衛門刊。旧蔵印「来田氏家蔵」「則親」。

[32] 枕草子春曙抄(まくらのそうししゅんしよしょう)

版本 大本6冊 (神宮皇学館文庫 914.3-Ke)

『枕草子』の注釈書。北村季吟著。延宝2年(1674)自跋。近世前期刊。旧蔵印「来田氏家蔵」「則親」。

[33] 清少納言枕草紙装束撮要抄

写本 大本1冊 (神宮皇学館文庫 914.3-Se)

『枕草子』の装束に関する記事の考証書。壺井義知著。正徳2年(1712)跋。宝暦5年(1755)来田有親写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

[34] 古今和歌集

版本 大本2冊 (神宮皇学館文庫 911.1351-Ko)

近世前期刊。旧蔵印「来田氏家蔵」「藤原有親」。

[35] 後撰和歌集

版本 大本2冊 (神宮皇学館文庫 911.1352-G)

近世前期刊。旧蔵印「来田氏家蔵」。識語「西国頭」。



V さまざまな源氏享受

『源氏物語』は多くの人々に愛読され、その影響の下にまた新たな文学作品が生み出されていった。ここでは『源氏物語』がどのように受け継がれていったか、あるいは変容していったか、そのいくつかの例を見てみたい。

平安時代後期～中世の享受

『源氏物語』成立からおおよそ50年後の日記『更級日記』には、『源氏物語』を何とか手に入れて読みたいと熱望する様子が描かれている。そのような熱心な読者たちによって平安時代後期から中世にかけて、『源氏物語』の影響を色濃く受けた多くの王朝物語が作られていった。

[36] 更科日記

版本 大本2冊 (小林文庫 915.36-Su)

西門蘭溪校。天保9年(1839)岡田屋嘉七(芝神明前)等8軒刊。旧蔵印「村井之印」。

[37] さごろも

写本 半紙横本3冊 (神宮皇学館文庫 913.49-

奈良絵本。金銀箔を用いて濃彩色を施した豪華挿絵入り。近世前期写。旧蔵印「来田氏家蔵」。

▽平安時代後期成立。作者未詳。狭衣大将の、の宮とのかなわぬ恋を中心に、女二の宮や飛鳥との悲恋を描く。



[37]

[38] 絵入 住吉物語

版本 大本2冊 (小林文庫 913.41-Su)

絵入。宝暦9年(1759)梅村三郎兵衛(寺町通松原下ル町)刊。旧蔵印「日南図書」。

▽平安時代の同名の物語(散逸)の鎌倉時代での改作。作者未詳。継母の奸計を避けて住吉の尼のもとに身を寄せた姫君が、長谷観音の利益で貴公子と結ばれる。

[39] 小夜衣

写本 半紙本3冊(列帖装) (小林文庫 913.38-Sa)

本文は完本の第二系統。近世中期写。

▽鎌倉時代中期頃成立。作者未詳。兵部卿宮と山里に住む姫君との恋物語に、継子いじめの話をかからませたもの。

近世の享受

その後、江戸時代になり一般層にまで普及した『源氏物語』は、物語や和歌にとどまらない、より多様な形で享受されていくこととなった。その一つに柳亭種彦の『偽紫田舎源氏』などの源氏翻案小説がある。『源氏物語』を同時代的な風俗に置き換えたこれらの作品は、作者・読者双方のある程度の『源氏物語』の知識なくしては成り立つものではなかった。

[40] 室町源氏胡蝶巻（むろまちげんじこちょうのまき）

版本 小本 20 冊（全 26 編 52 冊合）（個人蔵）

『源氏物語』の舞台を室町時代に置き換えたパロディ小説。表紙、多色刷。二世柳亭種彦等作、二世歌川国貞等画。文久 4 年（1864）～明治 16 年（1883）林（蔦屋）吉蔵（京橋区南伝馬町壹丁目二番地）刊。

（参考・女訓書）

当時の教養・知識を示す資料の一つとして、女性向け教訓書「女訓書」がある。『源氏物語』、『小倉百人一首』は特に良家の子女必須の教養とされ、多くの女訓書がそれらを取り上げている。

[41] 源氏物語絵尽大意抄（げんじものがたりえづくしたいいしょう）

版本 小本 1 冊（個人蔵）

女性・子ども向けの『源氏物語』五十四帖の絵本（『源氏物語五十四帖絵尽』の再版本）。溪斎英泉画。巻ごとに 1 つの場面を取り上げ絵画化したものに、その巻の代表的な和歌 1 首を添える。『源氏物語』の講釈を記した頭書あり。本文前に紫式部の図、近江八景の図あり（多色刷）。天保 8 年（1837）李園主人序。天保 8 年（1837）和泉屋市兵衛（江戸芝神明前）刊。

[42] 湖月百人一首操庫（こげつひやくにんいっしゅみさおぐら）

版本 小本 1 冊（個人蔵）

女訓書。前半は『源氏物語絵尽大意抄』。後半は、①作者肖像画を付した「小倉百人一首」、和歌解釈を記した頭書あり。②女性向け教訓（「今川になぞらへてみづからをいましむる制詞の条々」、柱題「女今川」、頭書には「女五性名づくし」（女性の名前を木性・火性などに分けて列挙したもの）、「女中四芸の事」（書筆・裁縫・詠歌・弾琴）、「女中文書様」、「女言葉つかひ」、「裁物仕やう」、「願じやうじゅ（成就）日」、「不成就日」の事。天保 9 年（1838）和泉屋市兵衛刊（刊記一部のみ存）。

[43] 女訓書（外題・内題欠。仮題）

版本 大本1冊（個人蔵）

女訓書。上下二段組で、下段は肖像画入りの「小倉百人一首」、上段は「吉書（かきぞめの）詩歌」、「七夕詩歌」、「四季用文章」、「鏡の由来」（鏡・櫛・守り刀・簪・天児・犬張子について）、「人間生涯の祝義」（七夜・喰初などの人生の通過儀礼について）、「源氏香の図引歌」等、女性に必須の雑知識を記す。見返は和歌三神図か（ほぼ剥落）。後表紙見返剥落。刊記欠。近世後期刊。

[44] 百人一首（原題簽・内題欠。書名は柱題による。改装表紙書外題も同）

版本 半紙本1冊（個人蔵）

「小倉百人一首」の書。各歌人につき半丁、作者名・和歌・肖像画・簡略な注釈より成る。肖像画の周りをその和歌にちなんだ円形の絵で取り囲んでいることに特徴がある。刊記欠。書外題横に識語「安政二年」とあり。近世後期刊。旧蔵識語「新城新町／万屋豊平／虎之助」。

[45] 〈増補〉女用手習鏡（じょようてならいかがみ）

版本 半紙本1冊（個人蔵）

女性用の手紙文例集。本文上段に文中の行事の説明（一部挿絵あり）、語釈、「対名の事」（数詞について）、「祥月」、「小笠原折かた」（のし・袋等の折り方）、「封じやうひな形」、「十二月の異名」等、女性に必須の雑知識の記述あり。目録上段には「大日本国尽」「御所洗粉の方」、「懸香匂袋方」、「女中名づくし」、冒頭に「紫式部石山寺にて源氏物語を□作り給ふ図」あり。嘉永6年（1853）（三刻）須原屋茂兵衛（江戸日本橋通壺丁目）・須原屋伊八（同浅草茅町二丁目）～丸屋善兵衛（京都寺丁三条通）・秋田屋太右衛門（大坂心齋橋通安堂寺町）等6軒刊。

[46] 今様百人一首吾妻錦（いまようひやくにんいっしゅあすまにしき）

版本 大本1冊（個人蔵）

女訓書。先行の複数の女訓書を合綴したもの。99～148丁目が二段組で、下段は小倉百人一首（肖像画付き）、上段「百人一首読曲（ひやくにんいっしゅよみくせ）并五ヶの秘歌の事」、「三十六歌仙の図」、「源氏五十四帖〈引歌／香の図〉」（各巻を象徴的に表した絵・代表歌1首・源氏香図）、「手習し玉ふべき事」、「いろはの始り」、「片かないろは」、「裁物（たちもの）の口伝」、「歌読方心得の事」、「歌仙貝の図」（様々な貝を詠み込んだ歌・絵、歌合形式）となっている。永楽屋東四郎（尾州名古屋本町通七丁目）・同出店（江戸日本橋通本銀町二丁目）刊。幕末刊。



VI 源氏物語の絵画 2

ここでは、IIで取り上げた屏風以外の源氏絵を取り上げる。

[47] 薄雲巻扇面

春日嗣法 源崇朝

明石君が娘を抱いて、迎いの牛車に渡す別れの場面。

[48] 帚木巻扇面

雨夜の品定め的女性談義をする光源氏・頭中將・左馬頭・藤式部丞。
右上に戸袋に貼ったときの取っ手の跡がある。

[49] 土佐光起の絵による源氏絵版画 六枚

①空蟬巻

光源氏が暮を打つ空蟬と軒端萩をかいま見する場面。空蟬の弟の小君が描かれ、光源氏は描かれていない。

②夕顔巻

夕顔の蔦がからまる透垣の奥に、簾越しの夕顔と女房が描かれている。

③花宴巻

光源氏が弘徽殿の細殿で扇をかざして歩く朧月夜に出会う場面。

④朝顔巻

光源氏と紫上が、童女たちを庭におろし、雪まろばしに興じる姿を見る場面。光源氏と紫上は描かれていない。

⑤宿木巻か？

不明だが、秋の夕暮れに匂宮が中君と語らう場面か。萩の花が描かれている。

⑥浮舟巻

雪の中、匂宮が浮舟を小舟に乗せて宇治川を渡り、橘の小島で愛を誓う。

[50] 浮世絵による源氏絵のパロディ

A 其姿紫の写絵（そのすがたむらさきのうつしえ） 四 夕顔巻

一陽斎豊国画

光源氏と夕顔との出逢いの場面。夕顔が朝顔に、白い扇が赤い団扇に換えられ、牛車に乗って大路にいたはずの光源氏は、籠の横に若衆として描かれている。

B 紫式部げんじかるた 四 夕顔巻

梅蝶楼国貞画

夕顔が物のけに取り殺される場面を、橋の上と換え、歌舞伎仕立てのようにしている。夕顔が穴の開いた簾で身を防ごうとし、物のけの女の後ろの釣り提灯は、牡丹灯笼の趣向か。



2008年名古屋大学附属図書館 源氏物語千年紀記念事業

源氏物語の書物と絵画

発行日 2008年11月10日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B3-2(790)
TEL : 052-789-3667 FAX : 052-789-3693
<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館